

復興の現実～家族のありがたみ

印象に残ったのは、青山さんとのりこさんの語り部である。

2日目に行われた青山さんの語り部は、震災当初のことをメインにお話ししてくださった。3.11の日、避難指定所に逃げるよう指示されたにもかかわらず「ここにいたら津波にのまれる」と予知してもっと高台に逃げた人や、「避難指定所だから大丈夫」と言ってその場に残った人と短い時間の中でもたくさん考えた人がいたと聞き、人間っていざというときどうやったら助かるかについて必死に考える生き物なんだということを実感した。この高台に逃げた逃げてない人の中でも大きな文化の違いがあることを教えてくれた。海の街や浜辺付近に住んでいる部落の人は、津波が来るとわかっただけで高台に逃げろと教わっていて、自分を優先にひたすら高台に向かったという。一方で、内陸部に住んでいる部落の人は、津波はここまで来ないという教えが元々あり、そのせいで逃げ遅れた人がたくさんいる現実があった。

津波が引いた後の生活は、吉浜小学校はほとんど浸水し屋上でたき火をして過ごしたり、トンネルの中に閉じ込められて飲み食いせず一晩過ごしたりしたそうだ。また、交通の便が悪く食料が届かない避難所が存在したのも事実である。支援物資を地方からたくさん送られてくるにもかかわらず、手の届かないところに存在するこの事実が私にとって最も衝撃的であった。

3日目のりこさんの語り部が行われ、そこでは震災後から今に至るまでの復興の経過や仮設住宅での出来事をお話ししてくださった。震災前は学校の方々とも関わりがなくよそ者扱いであったが、震災後はそういった距離感がなくなったり、仮設住宅に来たことで津波が来る心配がなくなったりとメリットはあり“失ったものも大きいけど得たものも大きい”と伝えてくださった。しかし、現実を見ると家はないし引越すにしても仮設から仮設といった形になっていて「オリンピックよりも東北の仮設住宅をどうにかしたほうがいいのではないか？」と私は思った。今回の仮設での生活を終えて、狭いし朝夜は冷え込むし昼は暑いしと寒暖差にも耐えられるような構造ではなく、この中で4年間過ごしてきた仮設住民の方々はどんな気持ちなのかと考えさせられた。

このような話の中でも「完全に仮設を出て家を持つのが復興だ。家がないのは復興の“ふ”の字にもならない。」という言葉が一番印象的であり、家に帰ることができるありがたみ、家族と一緒に暮らしているありがたみを知るきっかけになった。いつも一緒にいるため、お互いわからなくなったり当たり前を忘れがちだったりするけども、今回のこの話を通して改めて知るきっかけになった。

バーベキューのときに、おにぎりをたてやまさんと作り、そのときに親子のような会話ができたのがフィールドスタディーでの大きな思い出になりました。それ以外にも、おい

しい料理の作り方を教えてくださって勉強になりました。